

(完結)コラボ作品！新
アヴェ(下)VSナマモ
ノ！シンフォギア界ア
ニマルNo.1三本勝負！！

クロトダン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品はタツツマンさんの作品「気づいたら新宿のアヴェンジャー（下）になった一般人」と私クロトダンの作品「シンフォギアの世界にネコアルクを投入したら面白おかしくなるんじゃないかね？」のコラボ作品です！

あらすじはネコアルクが新アヴェ（下）のいる世界に殴り込みに行き、どちらがアニマルNo.1にふさわしいか勝負する話です。

型月界、最初のアニマルと型月界、最新のアニマルの夢の対決!?

誰にも予想できない戦いが今始まる！

タツツマンさんに許可をもらい奇跡のコラボが実現できました！

7月10日、完結しました。

目次

0 本目！No. 1 アニマルはこのアチシ にや！	1
一本目！（前哨戦）1位になるには手段は 選ばない、それがアチシにや	6
一本目！ネコアルクを探せ！かくれんぼ 対決！！	17
二本目！捕まるな！追いかけてっこ対決！！	31
三本目！勝利を掴み取れ！フラッググレー ス対決！！	49
終幕、ナマモノ平行世界襲撃事件（尚、ナ マモノは吊るされている）	68

0本目!No. 1 アニマルはこのアチシにゃ!

——始まりはナマモノが持つある一冊の本から始まった——

——ネコアルク視点——

ドウモ、ミニヤサン。お久しぶり、アチシネコアルクにゃ!

イヤー、何故か凄く久しぶりな気分。どれくらい久しぶりだっけ? んーと……一ヶ月位?

——ピンポーン——

『スママセーン! アマゾネス・ドットコムです!』

「あ、ハイ! 今行くにゃ」

頼んでいた荷物が届き、アチシは玄関に向かい、ドアノブに手を伸ばして扉を開くと、目の前に眼鏡をかけ、黒いネクタイを着けたまさしくアマゾネスみたいな服装をした銀髪の少女が荷物を持って立っていたにゃ。

「あにゃ? これはこれは、社長自ら荷物を運んでくれるとは、どうもありがとにゃ。肉球

判でいいかによ？」

「何、アマゾネス・ドットコムはまだまだ発展途中だからな。社長自ら動けば利用者が増える筈だ。構わないぞ、ここに押ししてくれ」

—ポンツ—

「それでは次もアマゾネス・ドットコムをよろしく頼む」

「ありがとうにやー！……さてと」

アマゾネス・ドットコムの社長さんが帰って行くのを見送ったアチシは、直ぐにリビングに設置してあるアチシ用のソファア—（ペットショップにある少し大きめのやつ）に座り込み、荷物の包装紙を剥がたにや。

包装紙を剥がし終えると中からメイド服を着たキツネ耳と尻尾を生やしたピンク髪の女がオムライスを差し出している表紙がプリントされた「月刊みんなのアニマル」と書かれた雑誌を手取るにや。

「さーて、今月の型月アニマルランキング、アチシは何位かによ？」

アチシはランキングの順位が気になり、笑みを浮かべて雑誌を開いて目的のページに目を通す、そこには——

「……………なんじゃこりやあああああつ

!?!?!?

Σ（Φ皿Φ＊）

——そこには信じられない光景を観てアチシは思わず大声を挙げてしまったにゃ。
それは……。

【今月のNo. 1アニマルは、第〇〇番世界にいるロボ君に決まりました!】

【一位になった決めてはやはりこのモフリがいがある毛並み!】

ロボ君の飼い主である少女Cさん曰く、『ロボの毛並みは柔らかくて、抱きしめて寝ると気持ちよく寝れるんだ』との事です。

「確かにロボ君の毛並みは柔らかさそうでモフリがいがありそうですね!私もロボ君にモフってみたいです!」

「馬鹿にや……っ!?このアチシが一位ではない…だと!？」

アチシは床に両手と両膝を付いてあまりのショックで言葉を失ったにや。

※ちなみに、アチシはランキング最下位で、コメントには「目が気持ち悪い」「ネコト
いうか宇宙人?」「つかこれ生物か?」等が書かれていたにや。

「……ふ、フッフッフツ、にやーハツハツハツ!!面白い。このアチシをさておいて一位に
なるとは……生意気にや!」(??ω??) キュピーンッ!

アチシは懐から紙とペンを取り出して、この部屋の家主である二人の少女宛に伝言を
書き記した後、「キヤッツ・ワールドゲート」を発動して並行世界に通じる扉を呼び出し
たにや。

「待っているロボよ!今からアチシがそちらに行き、どちらがNo.1アニマルなのか
白黒付けようかにや!」

アチシはこれから向かう先にいる狼に向けてそう言った後、ロボのいる並行世界へ
渡って行ったにや。

5 0本目!No. 1アニマルはこのアチシにゃ!

—ネコアルク視点、終了—

一本目！（前哨戦）1位になるには手段は選ばない、それがアチシにや

——ロボ視点——

やあ、新宿のアヴェンジャーの下のほうに転生した一般人だったロボだ。

キヤロルが起こした《魔法少女事変》から三ヶ月が経過して、エルフナインちゃんも復活して、街の復興も着々と進み始めて、漸く平和になったよ。

俺はクリスちゃんやんが学校から戻ってくるまで自宅で留守番しているんだけど、なんか今朝から誰かに視られている気がして落ち着かない。

誰かいるのか部屋を見渡しても誰もいないし、隠れているのかと思いい匂いを嗅いでみても、いつもの家の匂いがあるだけだし：なんか落ち着かない。

誰かいないかも一度部屋を見渡してみる。

大きなテレビ、大きなソファア（クリスちゃんはずっと俺をソファアにしてるから、あまり使っていない）、クリスちゃんのご両親の仏壇、普通の棚、二本足で直立して腕を掲げているネコの置物、冷蔵庫の中、うーんやつぱり誰もいない。

一体、なんだろうな？

『あれ？どうしたんですかロボさん？そんなウンウンと唸って？』

あれ？セレナちゃんいつの間にかいたの？最近見なかったから、どうしたのかと思つたよ。

『えつ、ずっと側にいましたよ？』

オウ…マジか。気が付かなかったよ。

『フフ、大丈夫ですよ。それで？どうして唸ってたのですか？』

ああ、実は今朝から誰かに視られているような感じがしてさ、それがなんなのか落ちて着かなくて。

『んー、私も今朝からここにいましたけど、何も変わった様子はみられませんよ？』

そっかー、…お！いいこと思いついた！

俺は全体を見渡してから、この状況を打開するあの言葉を言ってみた。

…：…貴様、見ているな！

『なんですかそれ？』

いや、視られているときはこれを言えばなんとかなるかなあと思つたけど、やっぱり

何も変わらな——

「フッフッフッフ……まさか、気配と匂いを消したアチシに気付くとは、さすがはアニマルランキング1位のロボだにや」

なっ！何処かから声が……！誰だ！何処にいる、姿を現せ！

「フッフッフッフ……よかろう！お望み通りアチシの姿を見せてやろう！ソイニヤツ！」

—パカッ—

ソファアのクッションの下からナニか出てきた。

というかお前誰ッ!?いつの間にソファアの下にこんなスペースを!?

「ニヤツハツハツハツ！アチシネコアルク！しがにやいただのネコにや！よろしく。」

スペースは昨日の夜中に忍び込んで勝手に作ったにや」

は？ネコアルクって確か月姫に出てくるネコみたいな生物だよな？なんでここにいるんだ？

いや、それ以前に不法侵入!?!そして、人ん家のソファアを勝手に改造してなんで偉そうにしてんのお前!?!

『ネコアルクさんって言うのですか？私はセレナ・カデンツァヴァナ・イヴです。幽霊をやってます!』

「あにや？こっちの世界のセレナちゃんは幽霊なのかにや？にゃんか変な感じ」

ちよつとセレナちゃん……しれつと自己紹介してないで突っ込んでくれるかな？

「というか、こっちの世界？その言い方……もしかしてお前、並行世界からやってきたのか？」

「That's right! その通りアチシはお前に用があつてきたにや」ゴソゴソ
俺に？

「えつとそれはねー……お前の命を殺る為だにやアアアアアッ！」

何の用だと首を傾けてネコアルクに質問すると、目の前のナマモノがどこからか出した刺付きの棍棒を振りかざして襲い掛かって来た！

ーベシンツー

「グベシツ!!」

まあ、こいつの身体小さいから前足で上から押さえつけるだけであつさりと終わったけど。

ーガチャツー

「ただいまロボ」

あ、クリスちゃんお帰りー。

「留守番ありがとな。あたしの留守中何も起こらなかつたか……つて、何かいるうううっ!!」

クリスちゃんが俺の前足に潰されているネコアルクを見て声を挙げた。

まあ、びつくりするよね普通。

——ロボ視点、終了——

・ ・ ・

—— S・O・N・G・本部 ——

—— 司令室 ——

—— ネコアルク視点 ——

ヨツスヨツス、アチシネコアルク。無事にロボがいる世界にやって来たにや。

この世界のクリスちゃんの家お邪魔に侵入して、ロボを亡き者（亡き獣？）にしようと思

掛かってみたんにやけど……あつさり返り討ちにされたにや（ΦωΦ）オノレ

今アチシはこの世界のS・O・N・G.の司令室に連れていかれ、そこでこの世界の弦ちゃん達に事情を説明してる途中にや。

「それで、君は何故ロボ君を亡き者にしようとしたんだ?」

「そうだ! なんだあたしのロボに手を出そうとしたんだよ! 下らない理由ならただじゃおかねえぞ…つ!!」

おおう…、さすがクリスちゃん。並行世界でもその気迫は変わらにやいのね。

「いやー、実はこの雑誌のランキングを見たからにや」

アチシはキャッツストレージから、「月刊みんなのアニマル」を取り出してみんなに見せたにや。

「へー、いろんな動物が写っているんだ?」

「可愛い動物がいっぱいデス!」

『あつ! 金色の羊もいるんですね!』

「ちよつと待って、どうみても動物には見えないのが写っているけど…なに、この大統領王って? 着ぐるみ?」

アチシが渡した雑誌にみんなやがページを開いて、各々感想を口にしたにや。

まあ、マリアさんの言う通り動物には見えないものもあるけどね。

大統領とか、自称呂布とか、ジャガ村とか、猫なのか犬なのか狐なのかわからんメイ

ドとかにや。

「あれ？この雑誌？」

「どうした雪音、見覚えがあるのか？」

次のページを開いているとクリスマスちゃんがあるページを見て声を出して、翼さんに声をかけられたにや。

「あ、その……。少し前にネットで『みんなの自慢のアニマル』って、募集をしてるのを見てさ。

その文に——『自慢のアニマルの写真を投稿して、No. 1アニマルを決めよう』——って書いていたから、ロボに内緒で送ったんだ。

まさか1位になるとは思わなかったけど……」

「なるほど……。それでこのランキングで1位になったロボを見たお前はロボを亡き者にしようところの世界に来たのか」

「大正解！」

さつすが翼さん。やはり、どの世界に行っても翼さんは翼さんにやね（お胸も同じにやね）

「今、何か言ったか？」

「言っつてにやいにや」

鋭い。

「しかし、1位になるためとはいえ、実力行使にうつるのは関心しないな」

「師匠の言う通り! だってロボ君の毛並みこんなにモフモフなんだよ! ほら、触ってみたらその良さがわかるよ?」

ムムム、そこまで言うのなら触ってあげるにや。だがしかし!

「こんなものでアチシが堕ちると思わにやい事にやつ!」

——1秒後——

「フニャアアア………ツ」

『「」「」「堕ちるの早っ!」「」「」』

ハッ!。(。口。)

「ち、違うにや! まるで全てを包み込むようなモフリ具合に思わず身を委ねた訳じゃにやいにや!」

「いや、普通に堕ちてんじゃねーか」

………はい、そうです。

「何がしたいのお前?」

クリスちゃんに指摘され、アチシの後ろにいる狼に言われてしまったにや。

——ネコアルク視点、終了——

・
・
・

——響視点——

「ただいまー!!」

「遅くなってごめんねネコアルク。訓練が長引いちやつて、すぐにご飯の準備するからね」

「あれ？ネコアルク？いないの」

留守番してる筈のネコアルクの返事が返って来ない事に私達は首傾げて、リビングに向かった。

「やっぱりいない」

「こんな時間にいないなんて珍しいね? 今日是非番だったよね?」

「うん、昨日ネコアルクが言ってたから、間違いないよ。……あれ?」

テーブルに目を向けると私達の名前が書かれた紙が置いてあった。

「それ、書き置きかな?」

「そうかも、読んでみるね? えーと、何々……」

『ちよつくら、並行世界に殴り込みに行つてきます。心配にやいにや。すぐ戻るの、探さによいでください。』

b y ネコアルク』

……なんかとんでもない事が書かれていた!

「何やってんのネコアルク!?!」

「大変! すぐにみんなに知らせないと!」

「うん、行こう! 未来!」

私は未来と一緒にS. O. N. G. に向かいながら師匠に連絡をした。

「私が行くまで騒ぎを起こさないでね! ネコアルク!!」

——響視点、終了——

一本目!ネコアルクを探せ!かくれんぼ対決!!

——森の中——

——ロボ視点——

どうも、ロボだよ。

今、俺達は森の中を歩いている。

なんで森の中を歩いているのかと言うと、俺の命を狙ってくるネコアルクを納得させる為におっさんがある提案を持ち掛けた。

・ ・ ・

『にゃ?三本勝負?』

『ああ、勝負は三本制で先に二本先取した方が勝ちだ。勝負方法は君が決めていいが、命のやり取りや危険なルールでなければ、何をしても構わない。』

それで納得してくれないか？』

『んー。まあ、他ならない弦ちゃんの頼みにやし、アチシはそれで構わないにや』

『げ、弦ちゃん？』

・
・
・

んで、勝負内容を決めたネコアルクが、指定した場所に俺を含めた装者全員が森の中を歩いている。

『空気が澄んでいて、気持ちいいですねー』

いつも通りだね、セレナちゃん。

「しっかし、ネコアルクって奴はなんで勝負の場所をここに指定したんだ？」

俺の隣で歩いているクリスちゃんが、ネコアルクが何故ここにしたのか首を傾げる。

うん、俺もそう思う。

しばらく歩くと、ネコアルクが指定した大きな岩が置いてある拓けた場所に辿り着いた。

「ここかな?」

「あの子が言っていた目印の岩があるし、間違いないじゃない?」
響ちゃんとマリアさんが場所を確認していると……。

「ニヤーツハツハツハツ!!よくぞ参った、ロボと装者達よ!」

突然、辺りにネコアルクの声が響き渡った!

野郎!何処にいる!

「フッフッフツ……、もう勝負が始まっているのにそう簡単に姿を現したら意味にやいにや」

えっ?もう始まってんの!?

「はあっ!?!どう言う事だよ!聞いてないぞ!」

「そうデス!卑怯デスよ!」

クリスちゃんと切歌ちゃんがネコアルクに文句を言うが、当のネコアルクはそれを気にせず、そのまま言葉を続ける。

「フツ…、勝負に卑怯と言うとはまだまだオケツが青いお子様にやね」

「「なんだ（デス）とお!？」」

ネコアルクの煽りに二人だけでなく、他の四人もやる気に火が付いた。

「やる気が出た所で、ルールを説明するにや」

いや、遅いよ。自分の首を絞めるだけだろ。

「ルールは簡単。ロボと装者達は力を合わせて、制限時間の三時間以内にこの森の中にいるアチシを見つけ捕まえる事にや。」

捕まえる方法は攻撃をしても大丈夫だから遠慮なくしても構わないにや」

「あら? 攻撃してもいいのね?」

「それではこちらも遠慮なしに行かせてもらおう……」

「…お子様って言った事を後悔させてあげる」

ネコアルクの説明を聞いて、更に殺る気（誤字じゃないよ）の炎が燃え上がる。
死んだなあいつ。

「それでは改めて、よーいスタート!」

—ガサツ—

「「「「「……………」」」」」」

開始直後に早速見つけちゃったよ、おい。

「喰らいやがれっ、このネコモドキツ！」

「MEGA DEATH PARTY」

「蒼の一閃」

「EMPRESS↑REBELLION」

「一切・呪りeTTお」

「 α 式・百輪廻」

—チユドドドドドドンツ!!—

響ちやんを除いた全員の遠距離攻撃がネコアルクに集中して、土煙に包まれる。生きてるかなこれ？

土煙が晴れると、地面に倒れたネコアルクがそこにいた。

ピクリともしてない。えっ、マジで死んじゃった!?

『あ、なら私と同じ幽霊になりますね?』

いや、セレナちゃん、そういう問題じゃないよ!

おい、大丈夫かネコアルク!

俺はネコアルクの傍に寄って、無事かどうか確認しようと顔を近付けると……。

— ボンッ! —

《ハズレ》

ネコアルクの身体が爆発した後、ネコアルクがいた場所にハズレと書かれた一枚の紙が置いてあった。

「…ハズレ?」

「どういう事デス?」

「あ、そうそう。一ついい忘れた事があるにや」

俺達が驚いていると、再びネコアルクの声が聞こえてきた。

「今倒したのはアチシの分身にや。しかも質量を持つて、匂いや能力もアチシと同じである。ハイスベックな分身にや!」

「イヤイヤイヤ! 質量を持ちながら、オリジナルと同じ能力を持つていて、それ本当に分身かつ!」

「し、か、も、デコイを倒すと倒した人にペナルティを受けて貰うにや」

「は? ペナルティ?」

「そのペナルティは、アチシの偽物を倒すと倒した人に……………」

「見た目が変わらず、倒した数の分だけ一体に付き一日間、体重が1kg増える事にや!!」

「なっ!」

「……なんだってええええええつ!?」「……」

あ、あいつ……女性にとつて、一番嫌なペナルティを入れやがった……っ!?

「フッフッフ……、それでは皆さん制限時間までに残り999体のアチシ達から、本物のアチシを見つけご覧?ニヤーツハツハツハツハツ!!」

笑い声を挙げた後、ネコアルクの通信が終わった。

えーと、皆さん?

「体重が……増えるだど?」

「嘘よ……嘘だと言つて!」

「……本物を捕まえる為に偽物を倒さないといけないなんて……」

「乙女にとつて、残酷な罰デス……!」

翼さん、マリアさん、調ちゃん、切歌ちゃんが残酷なルールに身体を震わせる。

あのナマモノ、なんて恐ろしいルールを作りやがった……!

俺はこのルールを作ったネコアルクの度胸にある意味尊敬してしまう。

「……おもしろえ」

あれ?クリスちゃん?

「やってやろうじゃねーか、あのネコモドキ……ッ!!捕まえた後、あたしらにこんなクソみたいなルールを作った事を後悔させてやるよ!!」

おおっ!? クリスちゃんから怒りの炎が燃え上がっている!?

「……フツ、雪音の言う通りだな」

「そうね、ならあのナマモノに目にももの見せてあげましょうか」

「…乙女に触れてはいけないタブーに触れた事を……」

「後悔させてやるデース!」

「最速で、最短で、真っ直ぐにあの子を捕まえてみせる!」

他のみんなもクリスちゃんに触発されて、同じように炎が燃え上がる!

てか、どうなってるのそれ? 熱くない?

「行くぞお前ら!」

「「「「応っ!!」」」」

お、おーう。

俺とナマモノの勝負なのに、いつの間にか装者達全員の勝負になってたよ。そう思いつつ、俺は先に行くみんなの跡を追いかけに行った。

——ロボ視点、終了——

——ネコアルク視点——

ニヤツハロー、皆さん。ネコアルクにや。

イヤー、遂に始まりましたアチシ対ロボの対決。

今回考えた勝負はかくれんぼ対決。

しかもただのかくれんぼではにやい、アチシが出した999体の分身がこの森の中に潜んでいるにや。

まあ、ルールを説明する為に早速1体倒されたけど……。

だがしかーし!(??ω??)

「自身の体重が増えるの恐れながら、アチシを含めた残り999体の分身の中から、本物のアチシを見つけ出せる事が出来るかにや?ニヤーツハツハツハツハツ!!」

『報告シマス』

おや?分身732番どうしたにや?まだ定期報告には時間がある筈にやけど?

『ハイ、装者達ニヨツテ、分身達ノ数ガ300体倒サレマシタ』

そうかそうか、もう既に300体も倒されて……つて、ハアアアアアアツ!?
「ちよつと待つにや!もう300体も倒されたのアチシの分身!」

まだ始まって20分しか経つてにやいのに早くない!?それが本当なら、一人辺り30kgも増えた事ににやるよね!」

『ソウハ言ツテモ、事実デスカラ……ア、更ニ200体ノ分身ガ倒サレマシタ』
早っ!?

まさか、ここまでの力とは……っ!?

えっ、これアチシヤバくない?

『ア、更ニ100体ノ分身ガ倒サレマシタ』

「うっそでしよっ!」

さっきのと合わせて60kgの体重増加してるのに、向こうは体重が増えるのは怖くないのかにやっ!?

『あ!』

「あ?」

アチシの背後から声が聞こえて、振り向くと幽霊のセレナちゃんと目があったにや。

『「……………」』

無言になるアチシ達。

『エヘッ』ニコリ

「ニヤハッ」ニコリ

セレナちゃんが笑顔を見せると釣られてアチシも笑顔になったにや。

『ロボさーん!見つけましたよーっ!』

「ちよおっ!?!それズルくにやいっ!?!」

まさか、分身を倒している間に幽霊のセレナちゃんにアチシの居場所を探らせるとは……っ!?!

「ナイスだ、セレナちゃん!」

「漸く見つけたあ!」

ニヤアアアッ!?!見つけた!?!

「手間をかけさせやがって、このネコモドキイ……!?!」

「苦痛だったぞ、貴様の偽物を倒す度に私達の体重が増える感覚は……っ!?!」

「わかる?あなたの偽物を倒した瞬間、体重がどんどん増えていく私達の気持ち、あなたにわかるかしら……?」

ひ、ヒイヒイヒイヒイヒイッ!?!文面にもわかる、みんなの身体からイグナイト顔負けのどす黒いオーラが溢れ出てるウ!?!

「イヤ、本当に怖かった。一体倒していく毎にみんなから表情が消えていくのは本当に

怖かった」

おう…、もしかしてやり過ぎた？

「もしかしなくてもそうだよ」

デスヨネー(ΦωΦ)ニヤハー

「それじゃあ…覚悟はいいな？」ジャキツ

「最後に言い残す事はないか？」チャキリ

みんなが各々のアームドギアをアチシに向ける。

そうにやねー、しいて言うなら……。

「しばらく体重計を見るのが怖そうにやねー」

—ブチイッ！—

「「「喰らえエエエエエエツ!!」「」」」

「ギニヤアアアアアアアアアアアツ?!?!?!」

アチシの言葉を聞いて、ブチ切れた装者達の怒りの全力攻撃を受けて、アチシの意識は途切れたにや。

ガクツ……。

——ネコアルク視点、終了——

・ ・ ・

— S・O・N・G・本部 —

— 響視点 —

「何いつ!?ネコ君が一人で並行世界に行っただとおっ!？」

「はい!・そんなんです師匠!」

私は未来と一緒にS・O・N・G・本部に着いて、先に到着していた装者のみんながいるのを確認した後、ネコアルクが残した書き置きについて説明した。

それを聞いた師匠はいつもより大きな声で驚いた。

「まさか、ネコアルクが単身で並行世界を渡れるとは……!」

「本当、規格外な存在だよなあいつ」

翼さんが顎に手を当て、ネコアルクの能力について驚いて、奏さんがそれに同意する。うん、私もそう思います。

「たくつ、さつさとあの馬鹿ネコを連れ戻さねーとな！」

「問題はあの子がどこの並行世界に向かったという事ね……」

「何処に行つたんでしよう……ネコアルクさん？」

そうなんだよねー。書き置きには並行世界に行くとだけ書いてあつて、何処の世界に行つたのかわからないんだよねー。

「こうなつたらしらみ潰しに探すしかないデース！」

「……切ちゃんそれじゃ時間がかかるよ？」

「うーん、師匠どうしたらいいと思います？」

私は師匠に何かいい案がないか聞いてみた。

「……いや、切歌君の言う通りにしよう。各世界に装者達を送つてネコ君を探して貰う。」

そして、ネコ君を見つけたら身柄を確保、すぐにこちらの世界に戻るように」

「「「「「了解！」」」」」」

私が行くまで誰にも迷惑をかけてないでね、ネコアルク！

——響視点、終了——

二本目!捕まるな!追いかけてこ対決!!

——ロボ視点——

—モフリ……モフリ……—

やあ、只今装者達にモフられているロボだよ。

—モフリ……モフリ……—

最初の対決でネコアルクから一本取った俺達は次の対決が始まるまで、拓けた場所です
休んでいる所だ。

—モフリ……モフリ……—

最初の対決が終わった後、ネコアルクが（多分装者達の絶望の顔を見る為に）用意し
た体重計を見た彼女達は増えてしまった自分の体重を確認した途端、死んだ目をしてか
ら地面に倒れ込んだ。

—モフリ……モフリ……—

その光景を見た俺はみんなを慰めようと頭を擦り付けた後、横になってされるがまま
みんなにモフられている。

—モフリ……モフリ……—

まあ、お察しの通り自分達の体重を見たショックでいつものモフリ方ではなく、少しずつ俺をモフっている。

ほ、ほら、もつとモフってもいいよ？いつも以上にモフってもいいんだよ？

それに今日はお腹もモフってもいいぜ？ほら？ほら？だから元気出して？……ね？

—モフリ……モフリ……—

駄目だ……、小一時間俺をモフモフしても彼女達の傷付いた心はまだ回復仕切れてない。

やり過ぎだよあのナマモノ……。

「体重が……体重が……」ブツブツ

「クロス……あのナマモノ……クロス……」ブツブツ

「許せないデス……滅多切りデス……」ブツブツ

……あの、ネコアルクが許せないのはわかるけど、もう少し声を小さくしてください。本物の怨霊みたいに聞こえて怖いから。

『うらめしやー』

セレナちゃん、君がやっても怖いというよりかわいからね。

『ムウ……、残念です。ロボさんを怖がらせるチャンスと思ったのですが……』

いやどつちかかって言うのと、ネコアルクの偽物を倒していく毎に無表情になるみんなの顔がフィーネやネフィリムを相手した以上に怖かったわ。

モフリ……モフリ……

「ニヤツホー!みにやさんお元気ー?」

みんなが無言でモフっていると、身体中に包帯を巻いて、顔全体に噛み跡を残したネコアルクが空気を読まず、笑顔で挨拶してきた。

この光景を観てそんな感想を言えるお前は今すぐ眼科と脳外科に行つてこい。

「いやー、袋叩きの後にその狼にマミられるとはにやー……流石のアチシもヤバかったにやー。……その後、三途の川にいるご先祖達に追われたけどね」

そのまま逝けばいいのに……。

「んー、返事がにやい?なら仕方によい、アチシから元気になる言葉を送ろうではにやいか」

元気につて、こんな状態にした本人(本猫?)が何を言うつもりだ?

「フ、フ、フ、それは……みんなやが倒したアチシの分身を倒した数を個人ごとに報告します!」

モフリ……モフーピタッー

ネコアルクの声を聞いたみんなが俺をモフるのを止めて、ゆつくりと油が切れたよう

に顔をネコアルクに向ける。

あれ？クリスちゃん？突然立ち上がったってどうしたの？それに他のみんなも……
ヒイツ!?

呑気に笑っているネコアルクを冷めた目で見てるとクリスちゃん達が静かに立ち上がると、鬼……いや、修羅のような雰囲気纏って、無表情でネコアルクに音もなく近づいていった。

「あにや？みにやさんお揃いでアチシに何か用かにや？

いきなりアチシの手を握るなんて？

ん、もう片方も？にやにやつ？両足も握って、アチシを持ち上げてどうするにや？

……あの、顔が怖いですよみにやさん？

あ、ちよつと待つてアチシの間接はそれ以上曲がらにや——ギ
ニヤアアアアアアアアアアアツ!!!」

クリスちゃん達に処け……お仕置きされるネコアルクから俺はソツと顔を逸らす。

因果応報だよ、お前のふざけたルールのせいで落ち込んでいるのに、加算体重を言うとしたら、みんながそうなるのは無理もないよ。

いつものクリスちゃん達から想像できない行動に俺は黙ってそれが終わるのを待った。

...

—— 閑話休題 ——

「そ、それでは二つ目の勝負の内容を発表するにや……」ゲフツ

しばらくして少しスッキリしたクリスちゃん達にボコられたネコアルクは吐血しながら次の勝負内容を発表した。

「二つ目の勝負は……鬼ごっこにや!」

鬼ごっこ?

「ルールは簡単。装者達は森の中に入り、制限時間の二時間以内にアチシから捕まらずに逃げ切れれば勝ちにや。」

あ、因みにすぐに捕まってもつまらにやいから、アチシは開始してから十分後に行動

するにや。

更に逃げる側は捕まらないようにアチシを攻撃してもいいけど、アチシも捕まえる為に攻撃するからよろしくにや」

ネコアルクが言った内容に首を傾げていると、響ちゃんがネコアルクに質問した。

「えっと、ネコアルクだっけ？その内容だと君が凄く不利だけど大丈夫？」

「フツフツフツ、心配ご無用にや響ちゃん。アチシにとつちや、この程度は朝飯前にや！ニヤハハハハツ!!」

いや、強気だなお前。その自信はどこからくるの？

そう言って笑いながら装者達を煽っているネコアルクを俺はジト目で見た。

「それでは、ヨーイ……スタートオ！」

・
・
・

スタートして三十分が経ち、俺達は捕まらないように三組に別れて移動している。

「そろそろあいつが出てきてもいい頃だよな?」

スタート地点の方向を見て、俺の背中に乗ったクリスちゃんの言葉にそうだねと俺は頷く。

因みに組分けは俺とクリスちゃんチーム、響ちゃんと翼さんチーム、マリアさんと調ちゃんも切歌ちゃんチームに別れている。

予想通りの組み合わせだっけ? うん、俺もそう思う。

まあ、それはさておき……そろそろあのナマモノが出てきてもいい頃合いだけど、全然出て来ない。

……まさか迷っているのか?

広い森だし、探している内に迷ってしまうのも無理はないか。

まあ、例えそうなっても時間切れでこちらの勝ちになるし、その後にあいつを探せばいいか?

俺が呑気にそう考えていると――。

「うああああああああああつ!!」

聞き覚えのある声が森中に響き渡った。

というかこの声って……。

「先輩達の声!?!二人に何かあったのか!」

そう、別れて逃げている筈の響ちゃんと翼さんの悲鳴が聞こえたからだ!二人に何かあったのか心配していると――。

――ピンポンパンポーン――

『えー、逃げているみんなにやにお知らせにや』

「なんだ?」

どこからかネコアルクの声が辺りに響き渡る。

てか、この辺スピーカーなんてないけど、どうやって流しているのそれ?

『たつた今、逃げていた響ちゃんと翼さんを捕まえたにや』

フアツ!?!マジで!?!

「マジかよ!?!あの二人がこんな早く捕まるなんて……」

クリスちゃんの言う通りあの二人が開始三十分で捕まる事に驚いている。

あの二人を捕まるなんて……ネコアルクの奴、一体どんな手で二人を捕まえたんだ!

——一方その頃の響、翼チーム——

ネコアルクに捕まった二人は大きな木を背中に縄で縛られていた。

「う、ぐう……不覚つ。まさかあんな手で私達を無力化させるとは」
翼が顔をしかめてネコアルクの戦法に愚痴をこぼしている。

「うう……口がヒリヒリするよ〜。喉が痛い……」

隣には唇が真っ赤になっている響が涙を流していた。

「まさか、奴にあんな手があるとは……」

顔を上げた翼の顔を見ると彼女の唇も響と同じように真っ赤になっていた。

「恐ろしいな、奴の……○○○○拳は」

翼の視線の先に中身が少し溢れた○○○○が地面に転がっていた。

——それから四十分後——

『はい！マリアさん、調ちゃん、切歌ちゃん捕獲完了にや！さーて、残りはクリスちゃんと狼のみ！すぐに捕まえるから楽しみに待つててにや？ニヤハハハハッ!!』

「チツ！まさかマリア達も捕まるとはな……。あのネコモドキ、実力を隠してたな？」

クリスちゃんがネコアルクがいつ来るか警戒しながら、愚痴をこぼす。

確かに俺もあいつの力を甘くみていたけど、まさかここまでとは……。

俺はあのナマモノの匂いや音を見逃さないように嗅覚や聴覚を最大限に活用する。

どこだ……どこからくる……？

「来るなら来やがれ、蜂の巣にしてやる……！」

クリスちゃんがアームドギアを構えて、俺達はネコアルクがいつ出てくるか周りを警戒している……。

「ほう……、周りを警戒しながら隙のない構え。見た所長い間共に過ごした相棒同士と
いう感じかにはや？」

以心伝心のコンビと言いたいけど、だが無意味にや」

「上か!」

俺達の頭上からネコアルクの声が聞こえて、クリスちゃんがガトリングに変えたアームドギアを頭上に向けて撃ち放つが頭上から折れた枝だけが落ちていくだけでネコアルクの姿はなかった。

「くっ、どこに行つた!」

「こっちだにや」

「なっ後ろ……ぐあっ?!」

クリスちゃん!?

突然クリスちゃんの背後に現れたネコアルクが右手に持った何かをクリスちゃんの口に押し当て、そのまま力を失ったようにクリスちゃんの身体が地面に落ちた。

ちよっ、クリスちゃん大丈夫か!?

俺は慌ててクリスちゃんに近付いて前足でクリスちゃんの口に付いている何かを退かして無事なのか彼女の顔をみると、両手で顔を抑えて身体をプルプル震わせていた。

マジで大丈夫クリスちゃん!?ま、まさか毒!?

俺が慌てているとクリスちゃんから声が聞こえた。

「……………か……………」

どうしたクリスちゃん!か?

「……………か、辛いいいひひひひひひッ?!?!」

身体を起き上がらせて唇を真つ赤にしたクリスちゃんが涙を流して叫びだした。

クリスちゃんは口を抑えながら、辛さから逃れようと地面をゴロゴロと転がっていた。

え、辛いってこれってまさか……………グハアッ!?こ、この匂いはまさか!?

俺は地面に落ちている何かに鼻を近付けて匂いを嗅いでみると、様々な香辛料を混ぜた刺激的な匂いが俺の鼻を直撃し、俺は思わず身体ごと仰け反ってしまった。

麻婆豆腐!?しかも匂いからして激辛の奴!こんなのをクリスちゃんに食べさせていたのか!!

クリスちゃんの方を見ると辛さ耐えきれなかったのか白目を剥いて気を失っていた。

む、むごい……………。まさか、翼さん達ももしかしてこの麻婆豆腐に……………!?

「フッフッフツ……………その通りにや。この麻婆豆腐はアチシの知り合いから教わった料理。口に入れた瞬間、あまりの辛さに悶絶してしまう至高の一品にや」

ネコアルクはどこからか出した麻婆豆腐を食べながら説明する。

さつきから気になってたけど、それどこから出した?それ以前に辛くないの?

「さてと……残りは貴様だけにやロボ!貴様を捕まえ、残りの勝負に勝てばアチシはN

0. 1アニマルになれる!おとなしく捕まるにや!」

ネコアルクは麻婆を食べ終えた後、俺に向けて指を突きつけてくる。

やれるものならやってみな?けどな……そう簡単に俺を捕まえられると思うな――

シユンツ――よ……つて消えた!?!一体どこに?」

「どこ?を見てる?こつちにや」

姿を消した探そうと周りを見渡していると俺の下から麻婆の匂いと声が聞こえ、下を向いてみると麻婆豆腐を両手に持ったネコアルクがこちらを見ていた。

なっ!?!いつの間!!

すぐにネコアルクから距離を取ろうと後ろに飛ばうとするが、俺が動く前にネコアルクの動きのほうが速かった。

(?!ω?!?) キュピーンツ!

「麻婆豆腐真拳奥義!麻婆豆腐は甘口より激辛が一番!!」

ネコアルクが両手に持った麻婆豆腐を俺の口の中に無理矢理押し込まれた！
てか、辛ああああっ!!

なにこの辛さ!?!これ麻婆って言えるの!?!この辛さは料理を通り越して兵器だよ!?!
「ニヤハツハツハツハツ!?!どうだロボよ!?!この勝負アチシの勝ちにや!?!」

俺が辛さに悶えて地面を転がっているとネコアルクが高笑いをする。

「あ、因みにお前に食べさせた麻婆はお前でも食べてもいいように配慮して作った特別麻婆にや。アチシに感謝してよく味わって食べるにや」

いらねーよそんな配慮!?!こんなの食べたなら誰だっけこうなるわ!

俺はゆっくりと立ち上がり、鎌を出してネコアルクに攻撃しようとするが……。

「む?まだ動けるかにや?それじゃ念のためもう一発」スチャツ

ウエツ!?!い、いらぬ!?!もうそれ以上はいらぬ——

「はいドーンツ!!」

グハアツ!?!

ネコアルクの三枚目の麻婆豆腐を口に押し込まれ、辛さの許容限界を超えた俺は意識を失った。(ガクツ)

——ロボ視点、終了——

——ネコアルク視点——

「イヤー、終わった終わったー。さすがに手こずったにやあ」

アチシは目の前に転がっているロボとクリスちゃんを視界に納め、両腕を上げて身体
の凝りをほぐす。

「でもさすがは麻婆豆腐真拳、まさか装者達全員を倒すほどとは……恐ろしい技にや。
店長に教わらなければ、こうも簡単に捕まえる事は出来なかつたにや」

そう、今回アチシが装者達を捕まえる事が出来たのは、店長に教わった《麻婆豆腐真
拳》のおかげにや。

この技は麻婆豆腐を使い、相手を倒す真拳。そのあまりの辛さに耐えきれない者が
出てきて、いつしか禁断の真拳と言われるようになったにや……。

でも、何故店長がこの禁断の真拳を使ったのかにや？

「ウーン……ま、別にいいか。今回それのおかげで勝てたんだし、気にしなくていいにや。うん！」

さーて、装者達が目覚める前に次の対決の準備をするかにや。

アチシは分身達を出して、ロボとクリスちやんをみんながいるスタート地点に連れて行くよう指示してから、最後の対決の準備をしに行つたにや。

——ネコアルク視点、終了——

・ ・ ・

——響視点——

「うーん、ネコアルクってばどこにいるんだろ？」

平行世界に向かったネコアルクを探す為、私達は三組に別れていろんな平行世界を回っていた。

「あの馬鹿ネコ、どんな理由で行ったのか知らねーが、見つけたら一発ぶん殴ってやる！」

「落ち着け雪音、気持ちには解るがそれはネコアルクを見つけた時に振ればいい。今は奴を見つけたのが先決だ」

拳を震わせているクリスちゃんに落ち着いてと話した翼さんは了子さんとエルフナインちゃんに作ってもらったネコアルクを見つucker機械《ナマモノレーダー》に視線を向ける。

了子さん、ネコアルクに恨みがあるからってその名称はどうかと……。

「……………反応無し。この世界にもいないようだ」

「あーもう！一体どこほつつき歩いているんだよあの馬鹿ネコは！これで四つ目だぞ！」

頭を抱えたクリスちゃんが声を挙げる。

「喚いても仕方ない、一度元の世界に戻ろう」

私達はため息を吐いて他の世界に行こうと一度元の世界に戻ろうと、私達が出てきた場所に向かって行った。

本当にどこに行ったの？ネコアルク？

——響視点、終了——

三本目!勝利を掴み取れ!フラッグレース対決!!

——ロボ視点——

や、やあ……ロボだよ。

前回ネコアルクの麻婆豆腐真拳と誤解らない技を喰らい、その辛さに動けなくなつて負けてしまった俺達。

今はネコアルクが次の対決の準備の為、俺達は冷水を飲んで辛さを誤魔化しながら拓けた場所で休んでいる。

つーか、あのナマモノよくもやつてくれたな……、まだ舌がヒリヒリするよ……。 (ゴクゴクツ)

「あうう……まだ辛いいい……」

「くつ、まさか剣が麻婆豆腐に負けるとは……まだまだ修行が足りないか……つ」

「あなた達はまだいいほうでしょ……。私達なんかヌルヌルする液体を全身に掛けられたと思つたら、ギアのインナーが溶けて、その後縄で縛られて動けなくなった所に無理矢理口に押し込まれたのよ?……ほんと、酷い目にあつたわ……」

「ングツ…ングツ…プハアツ！うみゆう…ヒリヒリデース…」

「…しばらく麻婆豆腐は見たくない」

他のみんなも水を飲みながら愚痴をこぼしている。ほんと、加減つてものを知らないのかあのナマモノ？

あ、因みにみんなギアを解除していつもの服に戻っている。あの激辛麻婆を食べたせいでみんな歌えなくなったからね。

「う〜〜っ」

さつきから唸っているけど、クリスちゃん大丈夫？まだうまく喋れない？

「あ、あんのびやか^バネコ^カ〜〜っ！

あたしにあんにや物を食べさせてくれりやがつてえええ…この借りは倍に返してひやるからな！」

クリスちゃんが食べさせられた麻婆は他のより辛すぎたみたいで所々喋れにくくなっている。

「イヤーお待たせしましたー。ちよーつと、準備に手間取つてねー。最後の対決だから少し張り切つてしまったにや」

出たな、諸悪の根元。お前が食べさせた麻婆豆腐のせいでみんな涙目だよ。どうしてくれるんだ？

「ニヤニヤ? そうにやの? フーム、それほど辛くない麻婆の筈にやんだけどにやー?」

「「「それはお前の味覚がおかしいからだ(よ)っ(デースッ)!!」「「「」」

「ニヤハハハハハハッ!」

みんなからのツツコミにナマモノは気にもせず、笑い声を挙げる。

「まー、さすがにアチシもやり過ぎたかにやと思つたし、お詫びにこのドリンクをどうぞ」

考えを改めたのか、ネコアルクはまたどこから出したエルフナインちゃんをデフォールメした絵がプリントされた、栄養ドリンクを差し出してきた。

なにそのドリンク?

「ニヤッフ、フ、フ……これはアチシの世界のエルフナインちゃんが作った特製ドリンクにや。これを飲めば口に残っている辛さがなくなるにや」(ΦωΦ)っハイドロー

ネコアルクがクリスちゃん達に一本ずつドリンクを渡していく。

大丈夫それ? ナマモノの事だから、なにかあると思うんだけど……。

「ありがたいけど、大丈夫なのこれ? なにか副作用とかないわよね?」

ドリンクを受け取ったマリアさんが、ネコアルクに大丈夫か問いかける。

「ムムム……アチシを疑うのかにや? それにやら大丈夫。それはアチシの世界のエルフナインちゃんが店長が作った麻婆を食べてね、口に残った辛さをなくす為に頑張つて

作ったドリンクにやから、効能は折り紙付きにやよ」

そつちのエルフナインちゃんあの麻婆食べたのか……。

「そ、そう……わかったわ。あなたの世界でも、エルフナインが作った物なら安心して飲めるわね。ンクツ……あら？本当に辛さがなくなったわね」

「ンクツ……ンクツ……プハア！本当だ、あれだけ辛かったのがなくなってる！」

マリアさんが先に飲んでそう口になると、その後には響ちゃんが飲んだのを皮切りに他のみんなもドリンクを飲んで口に残っていた辛さがなくなった事に喜んでいる。

「ほれ、お前も飲むにや」

あ、ああ……ありがとう。

俺は警戒しながら、ネコアルクが差し出したドリンクを口に啜えて、中身の液体を飲み干した。お？イチゴ味だこれ。

『あれ？』

俺の隣でプカプカと浮いているセレナちゃんが俺が飲んでいるドリンクのラベルを見て声を挙げた。

どうしたのセレナちゃん？

『あの……ロボさん、そのラベルに信じられない数字が書かれていますけど……』
ん？信じられない数字？

いやだから、なんでお前は人に迷惑をかけなきや気がすまないの？

空の瓶はゴミ箱に捨てました
—— 閑話 休憩 ——

「さて！お互いに一勝一敗、後にも先にもこれが最後の対決にやー！」

ブレないなお前。あんな目にあつたのに、そのやる気はどこからきてるの？

装者達に睨まれながら、何事もなかつたかのようにネコアルクが笑顔で次の対決の内容を話し出した。

「最後の対決は……フラッグレースにや!!」

フラッグレース？

「ルールは簡単、アチシとその狼と一対一でこの場からスタートして、この先にあるゴールにあるフラッグを先にゲットする事にや。」

し、か、も、レースの途中には三つのエリアがあつて、二つのエリアには様々な罠を沢山仕掛けさせてもらったにや。二つのエリアを抜けて、最後のエリアをどんな手を使ってでも、先に突き進みフラッグを手に入れたほうの勝ちにや。

あ、それと、公平の為に罠の設置はアチシの分身達に任せただからアチシもどこにあるかはわからにやいから安心していいにや」

お前が言う安心という言葉は信用できないけど……ああ、ようやくこの対決が終われるか……。

短い時間だったのに何故か長く感じるな。

「てなわけで、準備ができたなら勝負開始にや」

・ ・ ・

——S. O. N. G. 本部、ギヤラルホルン保管室前——

「ギヤラルホルンが起動しただど!?!どういう事だ?」

「わかりません。ネコアルクさんがこの世界に来た理由を調べていたら、突然起動したんです! 一体どうして……!」

「考えは後だ。もし、我々に敵対する者なら装者達がいらない今、俺が相手をしなければならぬ。緒川エルフナイン君を頼む」

「わかりました」

「よし…開けるぞ」

弦十郎がギヤラルホルンが置かれている扉を開けて中に入ると……。

「なっ!?!お前達は!?!」

・
・
・

——数分後——

「準備はいいかにや?」

ああ、いつでもいいぞ。

俺はネコアルクに返事を返しながら、一気に駆け出す為に少し姿勢を低くする。
ネコアルクの分身を持ったピストルを上に向ける。

「ソレデハ、イチニツイテ。ヨーイ……」(ω)ノ。ポイツ

へ?なんでピストルを捨てるの?

——ジャキツ——

バズーカ!?

「スタートデス!!」

——ドーンツ——

「キヤツツターポ!」ギユンツ

ああ、ズルツ!

あのナマモノ、俺がバズーカに驚いている隙に先にスタートしやがった!てか速っ!?
「ニヤツハツハツハツハツ!アチシが素直にスタートすると思っただかにや?勝つためなら手段を選ばない、それがこのアチシ、ネコアルク!」(ΦωΦ) bグツ

「セコいぞお前!急げロボ!」

わかってるよクリスちゃん!

俺はクリスちゃんに頷いて、急いでネコアルクの後を追いかけに行つた。

— 第一エリア、おでんステージ —

ネコアルクの跡を追いかけて第一エリアに着いたんだけど……。

何このステージ!?

コンビニにある巨大なおでん鍋が俺の目の前に広がっていた!

「ニヤツハツハツハツハツ! 驚いたかロボよ!」

ネコアルク!

声が聞こえた方に顔を向けると、少し離れた場所にこちらを見ているネコアルクの姿が見えた。

手足が生えたおでんの具達に捕まった状態で

いや、どんな状況!?

「イヤー、着いたのはいいけどいきなりちくわトラップにかかるとはニャー。さすがのアチシも予想外」

この光景事態が予想外だよ!

「ウーム、やはりグラサンアフロの世界から持ってきた物は予想外な事が起きやすいねー。次からは別の世界のやつにするかにや……つてアヂャツ!!」

アレエエエツツ!?!にゃんか身体が沈んでいるうううーっ!?!アーーーーツツ!」

おでんの具達に引っ張られて、ネコアルクはおでんの底に沈んでいった……。

……行こう。

見なかつた事にした俺は、罨にもかからず先に進む事ができた。

・ ・ ・

——第二エリア、トラップステージ——

よし、二つ目のエリア！ここを抜けて最後のエリアを抜けてゴールにあるフラッグをゲットすれば俺の勝ちだ！待っててねクリスちゃん！！ウオオオオオッ！！

——カチツ——

一気に駆け出そうとしたら、踏み出した右前足から何かを押す音が聞こえた。

カチツ？え、なんか嫌な予か——ガアアアアッ！！——痛あつ！！

前足を上げて踏んだと思うスイッチを見ていたら、俺の頭の上から鉄板が降ってきた。

又オオオオオ……ッ。な、なんで突然鉄板が……？

「フ、フ、フ、驚いたかにや？」

なつ、ネコアルク!?生きてたのか!!

振り向くと口の周りにおでんの食べかすを着けたままのネコアルクがいた。

「フ、所詮はおでんの具材……アチシの胃袋の前に敵うと思っただかにや」ゲフー

あれを食べたの、凄いなお前……（引き）

ネコアルクはつまようじを咥えたまま、このステージの説明をした。

「わかっていると思うけど、このステージはトラップを中心としたエリアになっている

— 第三エリア、最終ステージ —

よ、ようやく最後のエリア……あのナマモノ、どんだけトラップを用意したんだよ……。

トリモチだったり、火炎放射だったり、その中でバリカントラップが一番最悪だった。逃げてても逃げてても俺のモフモフの毛皮を刈ろうと執拗に追い掛けてくるのは恐怖を感じたよ……。

「ゼエ……ハア……ゼエ……ハア……、あー、ヒドイ目にあつたにや」

出たなナマモノ……お前のおかげでこつちがヒドイ目にあつたよ。一応聞いておくけど、トラップはもうないよな？

「当たり前じゃ。最初に言った通りどんな手も使つてでも突き進み、この先にあるフラッグをゲットした方の勝ちにや」

ネコアルクが説明した後、先にあるフラッグを指を指す。見たところ3kmくらいの距離がある。

よし、この距離なら俺の足だとすぐに到着できる。悪いなネコアルク……この勝負、俺の勝ちだ！

(Φ ㊦ Φ) ニヤ
 ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ
 ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ
 (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ
 ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ
 ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ
 (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ (Φ ㊦ Φ) ニヤ

…つて、ワアアアアッ!?ネコアルクが沢山出てきた!?

ネコアルクが手を上に上げると俺の目の前に、大量のネコアルクが現れて、行く手を阻んだ。

てゆーか多すぎいいっ!!?!!どこから出てきたんだよコイツラ!!?

「ちよこつと別世界から呼びました」

コンビニ感覚でとんでも技使うなよ!!あ、こら!よじ登るなお前ら!辞めろしつぽを引っ張るなっ!!

「ニヤッフッフッフッフ、これでお前は動けまい……そこでおとなしくアチシがフラッグをとる姿を見ておくんだにや!」

あ、くそ!待ちやがれ!

俺は身体を震わせて、よじ登っている無数のネコアルク達をふるい落とすがすぐに他のネコアルク達が俺の身体をよじ登ってくる。

こうなったら鎌を出して切り刻みながら進むか……ん?

そう思い始めた時、空から大量のミサイルが飛んで来るのが視界に入り、それら全てネコアルクに向かって大量のミサイルが降り注いだ。

——チュドドドドドドドドドドドンツ!!——

——ギニヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!——

あれ?今の子ってクリスちゃんの《MEGA DEATH PARTY》?でも、クリスちゃんはスタート地点に待機してるのになんで?

疑問を浮かべていると倒れたネコアルクの元に見覚えがある人が近づいて行く。

その人物の姿を見た俺は驚いてしまった。何故なら――

「この馬鹿ネコ!!ようやく見つけたぞ!」

えっ、クリスちゃん!?でも、少しギアの形が違う?なんで?

何故なら、少し形状が違うギアを纏ったクリスちゃんがこの場に現れたからだ。

え?なんで?

――ロボ視点、終了――

終幕、ナマモノ平行世界襲撃事件（尚、ナマモノは吊るさ
れている）

前回のあらすじ

ゴール間際にミサイルの雨が降り注いで、それがネコアルクに全弾命中して黒焦げになつた。

——ネコアルク視点——

ロボとの対決をしている途中で、アチシの世界にいたイチイバルを纏つたクリスちやんが現れた後、少し遅れてギアを纏つた響ちやんと翼さんが現れたにや。

三人を見たアチシは、すぐに逃げ出したんにやけど、三人の連携によつて、あつさりとお縄仕留められたになつたにや。

気絶したアチシをお縄にした響ちやん達は、詳しい説明をする為に一度、この世界のS・O・N・G・本部に戻つたにや。

そして、響ちやん達に捕まつたアチシは何してるのかというところ……。

— S. O. N. G. 本部、司令室 —

「では、ネコアルク。お前に与える罰だが……」

1. 顔にしつぺ（響）
2. 刀で脳天から唐竹割り（翼）
3. 銃弾でハチの巣にされる（クリス）

「どの罰を受けたい？」

「1以外、死ぬ未来しか見えにやいんだけどっ!？」

自分の処刑方法の選択しているところにや。

「1にや!1でお願いするにや!」

「ほう、それでいいんだな？」

当たり前前によ。1以外を選んでもアチシの命がなくなるなら、響ちゃんのお仕置きの

ほうがまだマシにや。(まあ、死んでも直ぐに復活するけど)

「わかった。立花、後は頼む」

「あ、はい。わかりました」

アチシの答えを聞いた翼さんは、離れて立っていた響ちゃんに声を掛けてから、アチシから離れていったにや。

「ネコアルク」

「あ、響ちゃん。ニヤツホー」

「ニヤツホーじゃないよ、もう……心配したんだからね」

「ニヤハハハ……ごめん^全にや響ちゃん。ちよつと譲れない思いがあったから、つい衝動的に動いたにや」

そう、アチシがアマゾネス通販で頼んだ《月刊、みんなのアニマル》でアチシを差し置いて、一位になったあの狼をランキングから蹴落とし、アチシが一番になろうとこの世界に殴り込んで行ったのがこの話の始まりにや。

イヤー大変だったにやー、ロボを亡き獣にしよう^{お邪魔}とこの世界のクリスちゃんの家^魔に不法侵入したり、かくれんぼでこの世界の装者達にボコられたし……。まあ、おいか^けつこでロボに麻婆を食らわせて、少しスキリしたからいいけどね。

「それじゃいくよ、ネコアルク？」

— ロボ視点 —

ネコアルクの処罰が終わった後、俺達は元の世界に戻る向こうのクリスちゃん達三人を見送ろうと、ギャラルホルンの保管室に集まっていた。

因みに、ネコアルクは響ちゃんがあいつの首を抱き抱えるように抱き絞められて気を失っている。

「ネコアルクが迷惑をかけてすまなかった」

「いや、こちらは大丈夫だが……落ち着かないな」

「それもそうだな、まさか平行世界とはいえ、自分と会話するのは妙な気分だな」

「やっぱりどこの世界でも翼は翼なのね」

「む、そう見えるかマリア？」

「ほら、息びったりじゃない」

マリアさんの言葉を聞いた翼さんとネコアルクの世界の翼さんが揃って首を傾ける。

「まあ、お胸もそっくりにやしースコーンツッーニヤグツ!？」

あ、いつの間にか起きて、余計な事を言ったネコアルクの額に向こうの世界の翼さんが放ったアームドギアの小刀が突き刺さった。

「ふーん、こつちのあたしはそのデカイ狼と一緒に住んでいるんだな。後、少し触ってもいいか？」

「ああ、別にいいぞ。ロボは小さい頃に助けてくれてからずっと側にいてくれた、あたしの大切な家族だ。そつちにはロボはいないのか？」

「いないぞ。ま、あたしの場合には小さい頃にネコアルクと出会って、パパとママが帰ってくるまで一緒にいて遊んでくれたことかな」（な、なんだこれ……いつまでも触っていたい触り心地……!こつちのあたしは、これを毎日触っているのかよ……いいなあ）↑モフモフしてる

「そうなのか？」（フン、驚いたかそつちのあたし。ロボの毛並みはどんな奴でも、抗えない魔性の毛並みなんだ。ああ、それにしても相変わらずいい触り心地の毛並みしてるなあ……）↑こつちもモフモフしてる

まさか、二人のクリスちゃんにモフられる日が来るとは……世の中わからないなあ

……。

「ウーム……やはり、どっちのクリスちゃんも小さい頃は素直で純粹無垢だったんにやねーズドンツー……ゲイボルツ!」

いつの間にか復活して余計な事を言ったネコアルクが向こうの世界のクリスちゃんが放った銃弾が側頭部を撃ち抜いた。

「ひ、響が……響が二人いる……はふうっ」クラリ

「ちよっ!? 未来!」

「大丈夫、未来! しっかりして!」

「およろ!? 未来先輩が倒れたデス!」

「……でも、心なしかいい顔をしてる気が……?」

響ちゃんが二人いる光景を見た未来ちゃんが、嬉しすぎて顔を赤くした後、フラリと膝から倒れ込み、それを見た二人の響ちゃんは慌てて未来ちゃんの側にしやがみ込んでそれぞれ、未来ちゃんの片手を握りしめた。

いや、響ちゃん。それ多分逆効果だと思う。現に未来ちゃんの顔が言葉に表現するのが難しいほど嬉しそうな顔をしてるから……。

「ほほーう。そんなに嬉しそうにしてるなら、未来ちゃん……。今アチシと契約すれば、様々な平行世界の響ちゃんに会える【響ランド】を経営してるんにやけど、どうですかーキユツ！ー……にやエツ!？」

「ちよーつと、おとなしくしてよーねー？ネコアルクー？」

「ちよ、響ちゃん……。絞まつてる…絞まつてるから、少し緩めて………!」

またいつの間にか復活して、余計な事を言ったネコアルクが、向こうの世界の響ちゃんに首をきつく絞められていた。

……さつきから見えていたけど、もしかしてアイツ、いつもあんな事をした後、あんな風にお仕置きされているのか？

『（その通りにや）』

このネコモドキ!俺の脳内に、直接話し掛けてきた!?

・ ・ ・

— クリスの家 —

平行世界からやって来たクリスちゃん達がネコアルクを連れて、元の世界に帰ってから数日が経ったある日の朝。

— ピンポーン —

『スママセーン！アマゾネス・ドットコムです！雪音クリスさんとロボさんにお届け物です！』

家の玄関から、宅配便の声が聞こえた。

「あ、はい！珍しいな、家に荷物なんて？」

クリスちゃんもソファで代わりになっていた俺から立ち上がりながら返事をして、荷物を受け取りに玄関に向かっていく。俺はこの巨体だから、一緒に行くのと初対面の人がびつくりしちゃうから、おとなしくここでクリスちゃんが来るのを待つ。

『じゃあ、私が代わりに見に行きますね』

お願いねーセレナちゃん。ふああ〜あ。

俺の代わりにセレナちゃんが、クリスちゃんの跡を付いて行くのを見送りながらあくびをする。

ん？ちょっと待て。宅配便の人、さっきなんて言った？アマゾネス・ドットコム？……なんか、どこかで聞いた事があるんだけど……どこで聞いたんだっけ？

—ガチャツ—

あ、クリスちやんが戻ってきた。

「なあ、ロボ。さっきの宅配の人がすごい格好だったんだけど、最近の宅配はあんなのが流行っているのかな？」

『あ、ロボさん。宅配にきた人すごい格好でしたよ！まさにアマゾネスって感じの格好で、スツゴク綺麗な女性でした！』

へー、そうなんだー。ところでさっき外で、雄叫びを挙げた女の人の声が聴こえたんだけど……、そしてアキなんとか言いながら、何か壊した音がしたんだけど、空耳じゃないよね？そうだよね？

「ま、そんな事より、一体誰からの荷物なんだ？……げっ」

どうしたのクリスちやん？何が書いてあった……げっ。

荷物の宛先欄に書かれた名前を見たクリスちやんが顔をしかめる。それを見た俺は、首を傾げながら、クリスちやんの後ろから名前を確認すると、思わず俺も顔をしかめた。何故なら……。

「ね、ネコアルクからの荷物かよ……」

そう、送ってきたのは数日前にこの世界にやって来たネコアルクからだった。

「あのネコモドキ、一体何のつもりで送ってきたんだ？」

クリスちゃんも文句を言いながら、包装紙を破いて中身を取り出すと……。

「……つて、雑誌？」

取り出してみると、「月刊、みんなのアニマル」と書かれた一冊の雑誌が入っていた。

これって、ネコアルクが持ってきた雑誌だよな？

でも、よく見たら、表紙が真っ白な体毛をした猫なのかりスなのかわからないかわい

い動物が描かれていた。てか、この表紙、フオウくんだ。

「何でこれを送ってきたんだ？……お？」

クリスちゃんは疑問を浮かべながら、雑誌のページを開いてしばらく捲っていると、

とあるページを見て、ページを捲る手を止めた。

俺とセレナちゃんも後ろから覗いて観てみるとそこには……。

「……へえ、なかなかいい写真じゃないか」

『皆さん、いい笑顔をしていますね』

うん、そうだね。

開いたページに写っていた写真を見た俺達は笑みを浮かべた。何故なら……。

《家族ランキング一位》

【大切な家族】

そこに写っていたのは、ネコアルクを中心に、ネコアルクの抱きしめながら笑顔になっっている響ちゃんと未来ちゃんが写っていて、響ちゃんと未来ちゃんの後ろには調ちゃんと切歌ちゃんとマリアさんが立っている。更に響ちゃんの右隣には翼さんとクリスちゃんが立っていて、未来ちゃんの左隣にはセレナちゃんと奏さんが写っていた。

写真の下にあるコメントには、「皆さんとてもいい笑顔をしていますね。観てるこっちも笑顔を貰っちゃいました！」と書かれてあった。

「……あいつ、ロボを倒して一位になるって言ってた癖に、こっちじゃ一位になってんじやないか。もしかして、これを見せたい為に送ってきたのかあいつ？」

ああー、なんかあり得そうだなあ……。

それに同意して、二人でこの雑誌を送ってきたネコアルクの姿を思い浮かべてみると、ドヤ顔でピースしてる姿が目に見え、思わず笑ってしまった。

—ピピピピッ—

「はい、こちらクリス。……わかった、すぐにそっちに向かう。—ピッ—ロボ、出動だ。すぐに本部に行くぞ！」

「ガウツ！（わかったよ、クリスちゃん！）」

『私も一緒に行きますよー！』

笑っているテーブルに置いてある携帯にS・O・N・G・本部からの緊急の連絡が入り、クリスちゃんが電話に出た後、俺に声をかけながら玄関に向かい、俺も返事をして、セレナちゃんを背中に乗せながら玄関に向かってきたクリスちゃんの跡を追った。

——ロボ視点、終了——

．．．

ロボ達がいなくなった後、テーブルに置いてある雑誌が風が吹いてないのに独りでページが捲られた。最後のページまで捲られるとそのページには紙が挟まれており、それにはあるメッセージが書かれていた。

【ロボへ、

今回の勝負はアチシの負けだにや。次こそはアチシが必ず勝つ、首を長くして待つてろにや。

——追伸、

近い将来、凄い困難が来ると思うが、お前達の力ならば必ず打ち勝つと信じてるにや。

だから——

——頑張れよ、狼王ロボ。

ネコアルクより】

【新アヴェ（下）VSナマモノ！シンフォギア界アニマルNO.1三本勝負!!】

これにて、完結!!